

ひこま
歴史回廊

第9部・再考 敵島合戦③

天文二十三(一五五四)年
五月十一日、毛利元就事

上の協力関係にあった陶晴賢と手を切り、軍勢を広島湾頭に進めた。「房頭覚書」などによれば、毛利方は一日のうち金山、己斐、草津、桜尾の諸城を接取し、陶の番衆を退放して敵島を占領した。

■経済活動通し説得

毛利側は、これを「防芸引分」と称している。周防の大内・陶と安芸の毛利が、敵味方に引き分かれたという意味である。しかし元就自身、挙兵直後は「現形」(裏切り)とどういふを使っている。

それまで維持してきた協力関係を毛利側から破棄したのであり、陶側が元就の行動を悪逆」と非難したのは、ある意味で当然である。

さて、このとき注目されるのは堀立直正という人物の働

防芸引分 電撃的裏切りの挙兵



きである。直正は、武士というよりは商人といふべき存在で、広島湾頭一帯で経済活動を行っていた。直正自身が天正三(一五七五)年に記した覚書によれば、直正は元就の指示を受け、大内方の番衆を説得して金山城を接取し、さらには廿日市・宮島の町衆たちを毛利方に引き入れたという。直正の交渉が成功したのは、商人としての日常的な経済活動を通して、町衆たちとの間に信頼関係を築いていたからだと思われる。

■軍事的に重要な島

一方、廿日市の桜尾城にいた陶氏家臣や神領衆己斐豊後守たちを説得して城を明け渡させたのは、吉川元春と熊谷信直(元春の妻の父)であった。元就、隆元の毛利本隊とは別行動を取った元春は、手勢を率いて可部の高松山城で信直と合流し、沼田・石内の谷筋を通って廿日市を目指したのであろう。

このように、元就の電撃的な軍事行動の最終目的地は、廿日市と敵島であった。ちょうど三年前、陶晴賢が挙兵に先立って、桜尾城を接取し敵島を占領したのと同じである。この地域の覇権を争う勢力が、この島をめぐって、敵島という島がもつ軍事的な重要性を物語っている。



敵島(奥の島影)をにらむ位置に築かれた桜尾城跡(手前の緑の丘)

(秋山伸隆・県立広島大教授)

土曜日に掲載します